日本宋代文学学会・立命館大学中国藝文研究会 主催

日本宋代文学学会 第12回大会

プログラム

日時:2025年5月17日(土曜)9:50開場、10:20開始
場所:立命館大学 衣笠キャンパス 創思館1階 カンファレンスルーム
大会参加費:1,000円

● 午前の部 10:20~12:10

9:50 開場・受付開始

10:20 会長開会あいさつ 九州大学 東英寿
主催校あいさつ 立命館大学 萩原正樹

【I】10:30~11:00 別号文学史から見た欧陽脩の別号の意義について

早稲田大学(非) 柴田寿真

(司会) 相模女子大学 加納留美子

【II】11:00~11:30 欧陽修『集古録跋尾』のテキスト「膳修」と文体の変遷

上海交通大学 黄小珠

(司会) 九州大学 東英寿

【III】11:30~12:00 「夢窓詞」における詞牌と宮調の関係について

立命館大学(院) 張志偉

(司会) 岡山大学 藤原祐子

—昼休み 12:00~13:30—

● 午後の部 13:30~17:30

【IV】13:30~14:00 蔡正孫『詩林広記』の特殊性について

——宋末元初の福建における詩学的傾向を踏まえて——

南開大学(院) 王飛鏡

(司会) 岡山理科大学 奥野新太郎

【V】14:00~14:30 陸輔之『詞旨』の詞論について—用例の出典を手がかりに—

大阪大学(院) 鮑功瀚

(司会) 神戸大学 早川太基

—休憩 14:30~14:50—

JSPS 科研費 23K21916・基盤研究(B)「宋代書簡に関する総合的研究」主催

「日本宋代文学学会」共催

【VI】14:50~16:30 第4回 宋代書簡シンポジウム

(司会) 大阪大学 浅見 洋二

①蘇軾の尺牘文に用いられた「呵呵」について

九州大学 東 英寿

②劉克莊書信から見た南宋文人生活の諸側面：贈答品応酬、潤筆、行巻、文房趣味

大阪公立大学 平田 茂樹

③從實物和觀念論宋代私人書信的四大體式——走向一種“寫作現場”的文體學

上海師範大学 李 貴

—総合討論—

—休憩 16:30~16:40—

総会 16:40~17:30

● 懇親会 18:00~20:00

場所:衣笠キャンパス 諒友館地階 生協食堂 懇親会費:5,000円

●●● 発表要旨 ●●●

【Ⅰ】別号文学史から見た欧陽脩の別号の意義について

早稲田大学（非） 柴田寿真

自ら別号を持つことは魏晋六朝のあたりに始まる。歴代の別号を持つ作家を見てみると、隠士やそれに類する経歴の者が多く、別号が既存の社会体制に属さない隠士としての表明であったことがわかる。ところが時代が下り、隠逸に対する考えやその在り方が変わってくるにつれて、別号も厳密な意味での隠士を表明する呼称ではなくなり、次第に文人的な雅号としての性格を強めていった。

そして魏晋以来の別号の歴史を通して見ると、欧陽脩の別号こそは、まさに隠士の別号から文人的雅号の転換点に位置するような特徴を備えている。本発表では、自らの別号を自作に用いる表現手法を「別号表現」と称し、「別号表現」の使われる作品群を「別号文学」と呼ぶが、欧陽脩の「別号表現」は、それまでの作家が基本的には散文の中で「別号表現」を使用してきたのとは異なり、ほとんどが詩の中で用いられている。

そこで今回の発表では、欧陽脩の別号がなぜそうした転換点に位置すると考えられるのかという問題ととともに、先述の特徴をもつ彼の「別号表現」が別号文学史上どのような意義をもつのかということについて考察する。

【Ⅱ】欧陽修『集古録跋尾』のテキスト「謄修」と文体の変遷

上海交通大学 黄小珠

台北故宮博物院所蔵の『集古録跋尾』真跡と方崧卿刊本「真跡」とのテキストの差異は、欧陽修が『跋尾』の執筆において長い間見過ごされてきた「謄修」のプロセスが存在したことを示している。謄修とは、欧陽修が原本として拓本に附されていた跋尾を修正し、独立したテキストとして清書する過程を指し、このプロセスは『跋尾』の執筆全体にわたって行われ、ほぼすべての篇目に関わっている。謄修は、『跋尾』のテキスト内容を変更し、複数の異文テキストを生成し、「集本」「真跡」といった複雑な版本の系譜を形成しただけでなく、その文体的な特徴にも深い影響を与えた。非考証的内容の削減と構造・体例・文章表現の整備を通じて、『跋尾』は率性の題跋の文体から厳密な考録の文体へと変容し、金石書写の範式が確立されたのである。さらに、謄修は後世の金石学に深遠な影響を与え、異なる時代の跋尾執筆スタイルを形作り、金石文体の発展に影響を及ぼした。

【Ⅲ】「夢窓詞」における詞牌と宮調の関係について

立命館大学（院） 張志偉

宋词は歌謡文芸の一種として知られるが、その音楽的側面の研究は、文学的側面に比べて十分には進んでいない。特に、詞に用いられる宮調に関する体系的な分析は未だ十分とは言えず、その音楽的特徴と詞の表現との関係についても、多くの未解明な点が残されている。

本研究では、南宋の詞人・呉文英の現存する諸版本の『夢窓詞集』を対象とし、その中に記録された宮調を詳細に整理することで、宋词における詞調と宮調の関係を考察することを目的とする。

『夢窓詞集』は、宮調の記録が残る数少ない詞集の一つであるが、その宮調に関する情報は未だ体系的に整理されていない。例えば、『夢窓詞集』の異なる版本における宮調記録の相違や、各校本における宮調の解釈の違いなどが、依然として明確に整理されていない状況にある。そこで、本発表では、それらの情報を整理した上で、詞調の押韻方式と宮調の関係を分析し、「同一詞調の作品における押韻方式と宮調の間に対応関係があるのか」、「同一宮調に属する異なる詞調の作品において、押韻方式と宮調の間に関係があるのか」といった問題について考察する。

さらに、他の詞人の詞集に記録された宮調の情報とも比較を行い、犯調や転調といった要素が宮調の変化にどのような影響を与えたのかを検討し、「同一詞調でありながら異なる宮調を持つ作品の関係性はどのようなものか」という点についても考察を加える。

本発表によって、『夢窓詞集』における宮調の情報を明確に整理するとともに、詞調と宮調の関係について新たな解釈を提示したい。

【Ⅳ】蔡正孫『詩林広記』の特殊性について

——宋末元初の福建における詩学的傾向を踏まえて——

南開大学（院） 王飛鏡

『詩林広記』は宋末元初の建陽の人、蔡正孫が編纂した詩学書。宋人による最後の詩話集にして、元代唯一の詩話集でもある。60名の詩人を選び、詩と詩話を組み合わせる特別な体例を採る。

形式上は詩を主とするが、実際には詩話を集成することが目的であった。また、詩の後ろに詩評を付すという体例は南宋末期に流行した文章彙評を応用するが、これも当時建陽に滞在していた師・謝枋得注『唐詩絶句』に啓発されたものである。また、建陽の魏慶之編

『詩人玉屑』も本書の成書に多大な影響を与えている。且つ、理学や刻書などの点でも、建陽に由緒がある伝統を継いでいる。

そして、本書が知識層の変容と詩学の大衆化という時代に生まれた点は注目される。元代に士と農工商の壁が打ち破られたにより、詩話は廃れ、詩学入門書の需要が高まったのである。蔡正孫は自らの挙子としての身分にこだわり、詩話の伝統を守りながらも、通俗化に適応するように、雅と俗、保守と革新の間を意識しながら体例を改め、新たな読者層を迎えたといえよう。

本書は宋代から元代への詩学の転換期における詩学の変容を示す、福建が育んだ象徴的な詩学書といえる。

【V】陸輔之『詞旨』の詞論について—用例の出典を手がかりに—

大阪大学（院） 鮑功瀚

南宋末期の雅詞を代表する張炎の弟子である陸輔之は、師の教えに基づいて『詞旨』を著した。『詞旨』は、「属对」「警句」「詞眼」という三つの分類枠のもとに、宋词の実作から秀句を選んで収録した、例句を中心とする詞論書である。挙げられた用例に解説は付けられていないが、その出典となる作品と照合することで、『詞旨』独自の詞観を見出すことができるであろう。ここでは、主として次の点を指摘したい。

『詞旨』において「属对」として選ばれた例句は、典拠となる作品における複数の对句のうち、最初に位置する对句が大半を占める。これにより、最初の对句が重視されていたことがわかる。「警句」として選ばれた例句の過半数は、作品の最後に位置するものである。結びの表現の工夫が求められていたことがわかる。そして、「詞眼」として選ばれた例句はすべて四字句であり、一句のうち、前二字と後二字とが对句となっている。句中对が関心の的となっていたことがわかる。

陸輔之『詞旨』に見られるこれらの特徴は、南宋雅詞の詞観において、詞の構成上、何が焦点となっていたかを示すものと言えよう。

【VI】第4回 宋代書簡シンポジウム

【VI-①】蘇軾の尺牘文に用いられた「呵呵」について

九州大学 東英寿

宋代になると、日常的な文章表現に「呵呵」という語句が新たに登場し始める。特に注目すべきは、この表現が主に尺牘文（書簡文）において使用されているということである。『全宋文』を調査した結果、「呵呵」を時代的に早く、かつ頻繁に用いているのは北宋の蘇軾であることが明らかとなった。しかし、李曉峰・楊淇の論文「唐宋詩文中“呵呵”的“禪喜”旨趣」（『中国韻文学刊』第36巻第4号，2022年）によれば、「蘇軾的‘呵呵’雖然尚無專門研究……」と指摘されており、蘇軾による「呵呵」の使用についてはこれまで専門的な研究が行われていないという現状がある。

本発表では、この研究の空白を埋めるべく、蘇軾の尺牘文における「呵呵」の具体的な用例を精査し、その表現意図や文脈を専門的に考察する。これにより、蘇軾が「呵呵」を用いた背景やその意義を解明することを目指したい。

【VI-②】劉克莊書信から見た南宋文人生活の諸側面：

贈答品応酬、潤筆、行巻、文房趣味

大阪公立大学 平田 茂樹

宋代文人の交遊はどのように行われるものであったのか？一つの手がかりとして合山究「贈答品に関する詩にあらわれた宋代文人の趣味的交遊生活」（『中国文学論集』2，1971年）を取り上げてみよう。この論文においては宋代頃より盛んになる贈答品の応酬ネットワークを論じている。同論文では、詩に付帯する形で送られる贈答品として、文房四宝、茶、酒の肴、果実など多様なものを列挙する。

本報告では、この贈答品応酬の実態解明において、合山氏が詩を手掛かりとしたのに対し、劉克莊の書信を分析対象とする。すなわち、劉克莊の書信を基本資料としながら、「潤筆」「行巻」「文房趣味」といったキーワードをもとに考察を行う。この作業結果として、書信、序、題跋、墓誌銘、行状などの所謂「書かれたもの」を通して宋代文人がどのような交流をしていたのか、また宋代において顕著となる文房趣味や骨董趣味がどのように「書かれたもの」の交流に関わっていたのかを明らかにする。

【VI-③】從實物和觀念論宋代私人書信的四大體式

——走向一種“寫作現場”的文體學

上海師範大学 李 貴

學界對宋代書信文體的辨析多依據文集和書儀。但書信被收入文集時往往經過了作者或編者的刪改，不能反映通信時的真實面貌。本文利用《宋人佚簡》《禪林墨迹》、北京故宮和臺北故宮所藏宋人書信、山西靈石縣出土南宋初下層武官武儀書信、《鳳墅帖》等宋代實物，結合歐陽修自編《居士集》、蘇軾自編《東坡集》、蘇轍自編《欒城集》、孫覲自編《鴻慶居士集》、陸游自編《渭南文集》、南宋日用類書所體現的文體標準，以及黃庭堅、李之儀、周必大、劉克莊等書信名家的辨體觀念，回到“寫作現場”，論證宋代私人書信有四大典型體式：啓、書、簡、劄子，“啓”是駢體文，在全社會廣泛的禮儀應酬中包涵有用的信息、微妙的情感和精美的藝術；“書”用古文寫作，常用來正式、公開地就公共話題闡述觀點、表明立場；“簡”的行文是可駢可散的“家常體”，是朋友家人間日常交往的短小書札，具有私密性、排他性；“劄子”作為為私人書信興盛於南宋，其體式近似書簡。“尺牘”在宋代可作為書、簡、劄子的通稱，也專指私密性的簡，但一般不包括啓。因此，宋代私人書信不能用“尺牘”代稱。

大会会場・懇親会会場 とアクセス

◆大会会場

立命館大学 衣笠キャンパス **創思館**1階 カンファレンスルーム(大会参加費 1000円)

◆懇親会会場

立命館大学 衣笠キャンパス **諒友館**地階 生協食堂(懇親会費 5000円)

◆立命館大学へのアクセス

立命館大学 HP「アクセス」<https://www.ritsumei.ac.jp/accessmap/kinugasa/>)を参照してください。

ルートは多数ありますが、**京都市営バス**もしくは**JRバス**を使って「**立命館大学前**」で降りていただくのが、大会会場の**創思館**へは便利です。

衣笠キャンパス地図(<https://www.ritsumei.ac.jp/file.jsp?id=227619&f=.pdf>)の**30**が**創思館**、**14**が**諒友館**です。